

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

琉球王国の成立と朝鮮半島：『おもろさうし』の政治的編纂意図から

吉成, 直樹 / YOSHINARI, Naoki / FUKU, Hiromi / 福, 寛美

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

47

(発行年 / Year)

2003-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022560>

琉球王国の成立と朝鮮半島

— 『おもろさうし』の政治的編纂意図から—

はじめに

日本史で言えば室町時代にあたる十五世紀の初頭。琉球列島に統一国家が成立する。一四〇六年に樹立された第一尚王朝の時代である。この王統は七代続くが、その後、政変によって倒され、一四七〇年、第二尚王朝の時代が幕を開ける。北は奄美諸島から南は八重山諸島にいたる南海の広大な領域を版図とする琉球王国が成立することになるのである。

以後、この王国は、いわゆる「琉球処分」の時代（明治五年の琉球藩設置から明治十七年の沖縄県設置にいたる過程）まで十九代続く。

統一国家成立以前、沖縄島を中心とする地域に、北山、中山、南山という、各地域の地方的な豪族（あじ按司）たちを支配下においた王たちが鼎立する時代（三山時代と呼ぶ）があり、そのなかから中山が台頭し、統一国家を樹立した

吉成直樹
福寛美

とされる。しかし、地方豪族たちが割拠していた時代から、三山時代を経て、第一尚王朝、第二尚王朝の成立にいたる過程は闇のなかにあると言つて良い。それを明らかにできる史料はあまりにも少ないのである。

確かに、第二尚氏時代、いくつかの正史が著されてはいる。たとえば、一六五〇年に琉球王府によつて編纂されたはじめての正史『中山世鑑』(向象賢編)。しかし、この記述をまともに信じる研究者は、恐らくいないだろう。みずから都合良く潤色されていることは明らかである。ただ、そうした正史を利用して歴史の一端を復元することはできるに違いない。偽りまで述べて隠さなければならなかったこととは一体何か、偽りまで記して語りたかつたこととは一体何か。たとえ、不十分なものであつたとしても、そうした視点からの分析で明らかになることもあるはずである。

ここに、琉球王国において文字記録として残されたもので最も古い『おもろさうし』と呼ばれる官撰の古歌謡集がある。王府の編纂による第一巻の編纂は一五三二年。第二巻以降の編纂は、それから約一世紀のちまでまつこととなるが、全二十二巻、一五五四点(オモロは「首」ではなくて「点」で数える)の古歌謡(オモロ)の編纂が終わつたのは一六二三年のことである。異論はあるものの、ほぼ十二世紀から十七世紀にかけて謡われたと思われる古歌謡を集めたものである。まさに歴史の空白期である、地方豪族が割拠した時代から第二尚氏にかけての時代、少なくともはじめての正史(『中山世鑑』)が編纂されるまでの時代の古歌謡なのである。

この古歌謡には、未知の部分が少なくない、というより充分に解読されているもののほうが少ないと言つて良い。しかし、この古歌謡群には、明確な政治的編纂意図が存在する。権力闘争の末に勝ち残つた者が、どのような政治的意図で『おもろさうし』を編纂したのか、という視点から徹底的に読む込むことによって何が明らかになるかを試みようと思う。

そうした作業の過程で『おもろさうし』がこれまで考えられていたような、海に囲まれた海洋国家が生み出した

「文学」などという言葉で一括りされるものではけっしてなく、その背後に、王位篡奪など権力闘争の跡を映し出している歌謡であることを窺い知ることができる。

本稿では、そうした視点から、統一王権の成立にあたって朝鮮半島が果たしたであろう役割の大きさを知ることになるだろう。従来の研究史のなかで強調されてきた、琉中関係でも日琉関係でもなく、琉朝関係の存在が大きく浮かびあがってくるはずである。それはまさに、これまでの研究の空白域である。

なお、琉球列島の民俗と文学を結びつける作業を通して、琉球王国の成立にあたって朝鮮半島のはたした役割の大きさを知ることになった。また、その過程で韓国の研究者との交流を通してこの二つの地域が互いの自画像を描くための鏡となりうることを認識した。本稿をこの成果報告集に寄稿したゆえんである。

I 聞得大君の神名

三山が統一されるのは、第一尚王統の時代とされる。第一尚王統、初代の王は思紹。その父は、沖縄諸島北端の島、伊平屋島の出身とされる。

さて、これまでの通説では、第一尚王統以前の察度王統（中山）の最後の王・武寧を南山の一面を占める佐敷按司であった尚巴志が倒し、王位を篡奪し、父・思紹を中山王に据える。そして、一四一六年、北山を滅ぼし、さらに父・思紹が世を去ったのち中山王の地位について尚巴志は、一四二九年、南山も滅ぼし、ついに三山を統一することになる。そして、この第一尚王統が、金丸（尚円）によって滅ぼされ、第二尚王統の樹立をみる。

金丸は第一尚王統の尚泰久王によって引き立てられ、やがて第二尚王統、最後の王・尚徳に仕えたことになっている。中山王に仕えていた者が、やがて中山王を引き継ぐ、という構図である。しかし、この第二尚王統の出自を考え

るうえで不思議なことがある。それは、きこえおきみ聞得大君にかかわる問題である。

琉球王国の王権のありかたには、特殊とも言える性格があった。それは、国王のひとりの姉妹が他界（オボツ・カグラと呼ばれる天上の世界など）から霊力（セチ）を呼び寄せ、その霊力を国王に与え、国王はその霊力によって統治するというありかたである。その姉妹を聞得大君と呼んだのである。琉球王国は、この聞得大君を頂点に、末端に置かれたノロという神女にいたるまでの階層があり、一大「神女組織群」を形成していた。聞得大君―君々（三十三君）―大阿母―ノロ、という階層である。

では、聞得大君は国王より上位に位置していたのかと言えは、そうではない。聞得大君であっても国王によって辞令を受けて任命され、俸給を得て生活していたのである（高良、一九八七、二二五）。いわば、この神女組織群は、一種の「官僚制」であったということになる。

さて、この国王の姉妹である聞得大君が就任するときの儀式を「御新下り」という。この儀式は、王国の最も重要な聖地であった斎場御嶽さいじょうみづたけと呼ばれる場所で行われた。この儀式の最後に、聞得大君に神名が授けられ、この役職に就任することになる。「しませんこ あけしののろ」というのが、その神名である（山内、一九七二、三三三―三五）。これは、最後の男性オモロ歌唱者からオモロの謡い方を学んだという山内盛彬やまうちせいはらによって聞き書きのかたちで報告されたもののなかに記載されている。

問題は、この神名である。この神名は、実は、沖縄本島北部の今帰仁なきじんにある「こもけな御嶽」にかかわる祭事を行う神女名なのである。なぜ、一地方神女の神名が聞得大君の神名になるのか。

研究者によつては、これは明らかでないでであると考える向きが多い。島袋源七（島袋、一九七二（一九五〇）、三二―三四）が報告している、明治四十年頃の今帰仁のコモケナ御嶽のノロ（島センコアケシノ）の成巫（就任）儀礼の神名と混同しているというのである。¹⁾ こうした混乱を招くのは、「御新下り」に関する記録がきわめて乏しいことに

も一因がある。しかし、山内盛彬の報告は、恐らく誤りではない。そのことは、これから第二尚王統の出自を探る過程で明らかになるはずである。

とりあえず、「しませんこ あけしののろ」が登場するオモロを引いてみよう。オモロの引用、大意、註は、外間守善校注『おもしろさうし 上・下』（岩波文庫、二〇〇〇年）による（以下、岩波文庫版『おもしろさうし』、と略記する）。

卷十七—二〇三（卷十二—七二六との重複オモロ）

一 しませんこ

あけしの、のろの

百度拍子（も、とひやし）

打ち揚がる成さい子

又なかひやにやの

せとひにやの親のろ

（しませんこ神女が、あけしののろ神女が、なかひにやの、せとひにやの親のろ神女が、お祈りをします。永遠の命を持つおもしろ拍子を打って、打ち揚がる父なる方の立派なことよ。／しませんこ・あけしの、のろ、国頭郡今帰仁村勢理客の神女。「あけしの」の異称が「しませんこ」。打ち揚がる成さい子、鼓を打って打ち揚がる父なるお方、按司様。）

このオモロの「しませんこ あけしの、のろ」は、今帰仁の勢理客の神女（ノロ）の名前である。

「しませんこ」という神女名が登場するオモロは全部で四点ある。上にかかげた「しませんこ あけしのゝのろ」(巻十七―一二〇三、巻十二―七七一六の重複オモロ) という用例のほかに、「しませんこ親のろ」という用例が二例(巻十三―九一三、巻十三―九一五)である。いずれも国頭郡今帰仁村勢理客の神女を指す。

「しませんこ あけしのゝのろ」と対をなすのは「なかひやにやの せとひやにやの親のろ」であり、「しませんこ親のろ」と対を成すのは「あけしの親のろ」(巻十三―九一三)、「今帰仁の親のろ」(巻十三―九一五)である。

「しませんこ」の異称である「あけしの」が用いられるのは三四例あるが、そのなかで間違いなく国頭郡今帰仁村勢理客の神女であると言えるのは五例である。以下に列挙するが、すでに掲げたオモロとの重複を含む。

- ・ しませんこ あけしのの親のろ (巻十三―九一三)
- ・ しませんこ あけしのゝのろ (巻十二―七一六)
- ・ しませんこ あけしのゝのろ (巻十七―一二〇三)
- ・ 勢理客ののろ あけしのゝのろ (巻十七―一二〇四)
- ・ 勢理客ののろ あけしののろ (巻十四―一〇二七)

では、残りの用例では、どのような神女を指すのかという問題が残る。それについて明確に答えることはできない。ただ、この神女が登場するオモロを見てゆくと、神出鬼没な性格を持っていることがわかる。

今帰仁の蒲葵杜(巻十三―八四四)に出現するのはもちろんのこと、東方の蒲葵杜(久高島の蒲葵杜。巻十三―八四五)、斎場嶽(巻十三―八四七)にも出現しており、久高島、斎場御嶽と並べると、あたかも聞得大君とも重なり合うかのようなものである。かつて、聞得大君は琉球王国の聖地であった久高島への国王の行幸に随行していた。

今帰仁に関連し、次のようなオモロもある。

卷十三—九一二

一 今帰仁（みやきぜん）に 立つ雲

金雲（こがねくも） 立ち居り

大君に

追手（おゑちへ） 乞うて 走りやせ

又金比屋武に 立つ雲

銀雲（なむぢやくも） 立ち居り

（今帰仁に立つ雲はめでたい金雲が立っている。金比屋武に立つ雲はめでたい銀雲が立っている。大君神女に追手の風を乞うて船を走らせよ）

岩波文庫版『おもろさうし』の脚注は、大君を「今帰仁^{あお}煽りやへか」としているが、「煽りやへ」とは今帰仁の在地神女であり、三十三君のうちの一ひとりである。しかし、常識的に考えて、単に「大君」と言えば「聞得大君」（聞えゝ名高いという美称辞）と同一人物である可能性も含めて、密接な関係にあると考えても良いのではないか。「大君」を「聞得大君」との関係を考える上で、「煽りやへ」は聞得大君職成立以前の最高神女であったことを想起すべきである。

また、次のようなオモロもある。

卷十七—一二〇四

一 勢理客ののろの

あけしのゝのろの

おり上げたる 清(きよ)らや

又石(いし)へつは こので

金(かな)へつは こので

(勢理客ののろ神女が、あけしののろ神女が、石へつ、金へつを作って、積み上げたぐすくの美しく立派なことよ／石へつ・金へつ、石を割ったり、削ったりする道具。石槌・金槌)

明らかに、今婦仁の神女である「あけしののろ」が石槌・金槌でグスクを「おりあげる」(＝積み上げる)とされているのである。こうした聖地を造営するのは、のちに述べるように、琉球開闢神話では、世の始まりに、国土創世のために出現する「アマミキヨ」という女神ということになっており、その「アマミキヨ」がなす同一の仕事を「あけしののろ」がなした、と語われているのである。この今婦仁の「あけしののろ」とは、その意味では「始原の存在」としての性格を持っていると考えられる。聞得大君の「原像」としてはふさわしい。

いずれにしろ、聞得大君の神名である「しませんこ あけしのゝのろ」と表現される場合、それは間違いなく国頭郡今婦仁村勢理客の神女と同一であることを確認しておけば充分であろう。

さらに、興味深いのは「しませんこ あけしのゝのろ」という神名を探っていくと思いがけない場所に行きつくことである。

卷十七―一二〇三のオモロで「しませんこ あけしのゝのろ」と対をなすのは「なかひやにやの せとひやにやの親のろ」であった。

ところで、「なかひやにや せとひやにや」に関連して次のようなオモロがある。

卷十七—二〇七

一 伊是名しうこ思い／大国しうこ思い／若松が とくらし

(又) ひやにや中ぐすく／中ぐすく 上て

又頂 (つぢや) 中ぐすく／中ぐすく 上て

(伊是名しうこ思い様、大国しうこ思い様よ。ひやにや中ぐすく、最高のぐすくである中ぐすくに上ってみると、若松様の子であるとくらし様の立派なことよ。／しうこ思い、人名。大国、伊是名島。若松、人名。)

伊是名しうこ思いの別称は「大国しうこ思い」であり、その名の男性が「ひやにや中ぐすく＝つじや中ぐすく」に上っている、と解釈できる。

このオモロで注目したいのは、「なかひやにやの せとひやにやの親のろ」という言葉のうちの「なかひやにや」が、このオモロの「ひやにや中ぐすく」に対応するのではないか、ということである。「ひやにや中ぐすく」とは伊是名島の聖域である「グスク」のことである。グスクとは御嶽みづたけと同じように古代の葬所ともされる(仲松、一九九〇、八五)。

もしこうした解釈が正しければ、次のような繋がりを想定することができる。

聞得大君の神名＝今婦仁村勢理客の神女名＝伊是名島の聖域名

これは、いかにも奇怪な繋がりである。しかも、今婦仁・勢理客の神女名と伊是名島の聖域名は、危うい細い糸で繋がっているに過ぎない。

しかし、第二尚王統の初代の王・尚円の出自を考えてみれば、これは決して不思議ではないことがわかる。

第一尚王統、初代の王・思紹の父は、沖縄諸島北端の島、伊平屋島の出身とされることはすでに述べた。

金丸の足跡を正史は次のように伝える。

一四一五年、金丸は伊是名島・諸見の百姓の家に生まれ、父を助け、農に励んだ。金丸、二十歳のとき、父母を失う。弟の宣威（尚円を継いで第二代目の王となる。在位七ヶ月）は当時、五歳。ある年、大旱魃になり村の人々の田の水は涸れているのに彼の田だけは水は満々と溢れんばかりであった。村人は彼が水を盗んだと疑い、彼を害しようとしたので二四歳の時、妻と弟を連れて国頭（沖縄島北部）に避ける。数年ののち国頭でも同様のことがおきたので、弟を連れ首里に出て王叔の越来王子・泰久に、家来赤頭として仕える。同僚の敬信を得て、のち泰久が王位についての内間の地頭職を任じられる。

尚円（金丸）の出身地もまた伊是名島なのである。伊是名島とは三山鼎立時代の北山の領域にあたる。そして、その北山の主城があったのは今帰仁なのである。そのような繋がりを追ってゆくと、聞得大君の神名が今帰仁村勢理客の神女名であり、伊是名島の聖域名であったとしても不思議ではない。

さらに、次のようなオモロがある。

卷十七―一二〇一（七一五との重複オモロ）

一 なかひやにや おわる／あれにしやよ／今（いみや）ど 降れて なよる

又せとひやにや おわる／あれ

（なかひやにや、せとひやにやに居られるあれにしや神女よ、今ぞ天降りをして神踊りなさることだ。／あれにしや、神女名）

このオモロには、「しませんこ あけしの」と対をつくっている「なかひやにや せとひやにや」という言葉がで

てくる。「なかひやにや・せとひやにや」の脚注として、「未詳」とあり、さらに「根家（村落共同体の草分けの家）の屋号か」とある。

しかし、そうではない。これに続いて次のオモロがある。

卷十七—二〇二

一内間掟／鬼さんこ／ゑけ 誇ら

又辺（あた）り山／垣内（かくち）山

又桑木（くわげ） 植ゑて／なです 植ゑて

又鼓 造て／鳴り呼ぶ 造て

（内間掟様、勝れたさんこ様よ、ゑけ、誇り、喜びましょう。辺り山・垣内山に、桑の木、なです木を植えて、鼓を造って、鳴り呼ぶを造ってお祝いをしましょう。／内間、今帰仁村内の地名。掟、村役人。鬼さんこ、内間掟に対する美称。鬼、貴人に対する美称辞。さんこ、未詳語。辺り山・垣内山、屋敷内外の土地。なです、桑木の異称）

このオモロの脚注には、内間を今帰仁村内の地名としている。しかし、『日本思想体系一八 おもろさうし』（外間守善・西郷信綱校注、岩波書店、一九七二年）の注では、西原間切（間切は、現在の市町村に相当する行政単位）の内間と解釈している。確かに、卷十七は「恩納より上のおもろ御さうし」（恩納より北の土地を謡ったオモロ）であり、中頭郡西原村とするには位置的におかしい。

しかし、このオモロの次が、さきに掲げた「しませんこ あけしのゝのろ」であること、その前が「なかひやにやせとひやにや」であることの配列に注目したい。これまでみてきたように、第二尚王統の樹立者である金丸にかかわ

りのある場所と聞得大君の神名は密接に関係している。そのことを踏まえれば、金丸が、国王に即位する前に西原間切の内間を領地としていたことを見落とすわけにはいかない。

以上のように考えれば、このオモロの前の、巻十七—一二〇—(七一五との重複オモロ)の「なかひやにや せとひやにや」も、金丸の出自に深く関係する場所である可能性がある。つまり、「しませんこ あけしの、のろ」と対を作っている今婦仁村勢理客の神女に関係があるのではないかということである。このふたつのオモロの間に、「内間掟 鬼さんこ」のオモロが割り込んでしまったために、流れが途切れ、ふたつのオモロの繋がりがわかりにくくなってしまったと考えられる。

「恩納より上のおもる御さうし」でありながら、西原間切のオモロが、この巻十七に入っているのも、かつての北山の領域に金丸の出自があり、西原間切内間もまた金丸に深くかかわっていたために組み込まれたに違いないのである。

この事例のように、突然、西原間切内間に関連するオモロが顔を出す事例はほかにもある。巻十四—一〇二五から一〇二八にかけてのオモロ群である。

巻十四—一〇二五

一 阿嘉犬(あかいん) お祝付(ゑつ) きや／饒波(ねは)のお祝付きや／国な頂(つぢ) 見ちへ 羨(うらや)め／又今婦仁(みやきぜん) 上て／鳴響(とよ) み国 上て／又しけち 出ぢやせ 盛て行きや／御酒 出ぢやせ 盛て行きや

(阿嘉犬お祝付きは、饒波のお祝付きは、国の頂を見て羨め。今婦仁に、鳴り轟いている国に上って、神酒を、お酒を出せよ、酒盛りをしていこうよ。／阿嘉犬お祝付き・饒波のお祝付き、おもしろ男性歌人。尚真王時代の人。国な頂、

国の頂・北山城の頂。しけち、神酒)

卷十四—一〇二六

一 聞多金丸が／思ひ子(ぐわ)の君の 遊(あす)べば／見欲(ぼ)しや しようちへ／又鳴響む金丸が／おなり神の 遊べば

(名高く鳴り轟く金丸様の思ひ子の神女が、おなり神神女が神遊びをすると、みんなが見たがり給いて、集まってきたことよ。／金丸、第二尚氏の始祖・尚円王。おなり神、男性をその姉妹の霊的な力で守護するとする信仰があり、その姉妹をおなり神と呼ぶ。思ひ子の君、王の愛児である神女。ここでは尚円王の娘)

卷十四—一〇二七

一 勢理客ののろの／あけしののろの／雨(あま)くれ 降ろちへ／鎧 濡らちへ (以下省略)

(勢理客ののろが、あけしのの神女がお祈りをして、雨乞いをして雨を降らせて、鎧を濡らして (以下、省略)／勢理客、国頭郡今帰仁村勢理客。あけしの、神女名)

卷十四—一〇二八

一 内間沖繩(よきなわ)(ち) よわちへ／神々 使い／又名高(なだか) 沖繩

(内間の名高い沖繩神女が、神々のお招きに来給いていることよ。／内間、中頭郡西原町内間か。沖繩、神女名)

順番にオモロのキーワードを並べると、今帰仁、金丸、勢理客ののろ(あけしののろ)、内間、ということになる。

これらのオモロの配列は作為的なものであることは間違いない。すべて第二尚王統の出自にかかわるオモロである。ことに、西原間切内間が並ぶことの意味は、金丸が内間の地頭職であったとされることと無縁ではありえない。『おもしろさうし』の一連のオモロ群は、ある明確な意図のもとに編纂されているに違いなく、こうした配列の問題も、そのひとつの例であろう。オモロ群に隠された意図をどのように絵解きすることができるかが、オモロ研究の大きな鍵を握っていることは疑いようがない。「文学」としてのオモロの解釈も、政治的な編纂意図（編纂しそこなつた部分を含めて）を明らかにすることによって、いつそう深まると考える。

さきに掲げた「なかひやにや せとひやにや」のオモロには、「あれ」「あれにしや」という名前の神女が登場する。「にしや」は接尾敬称辞である。この神女名は「あれ」ということになる。この名称と「しませんこ あけしの、のろ」とのかかわりが問題になる。やがて、思いがけないところで、この「あれ」という神女と出会うことになる。

以上のように、聞得大君の神名は、第二尚王統の初代の王・尚円（金丸）にかかわる場所、聖域にすべて結びついていく。これまでの、中山が北山を滅ぼし、やがて南山を滅ぼし統一国家を形成したという単純な歴史認識を改める必要があるのではないか、という疑いが生じるのは当然のことである。ことに、卷十四—一〇二五のオモロで、尚真王時代の男性オモロ歌人が、なぜ今帰仁を「国の頂」とまで賛美する必然性があるのだろうか。

聞得大君の神名が「しませんこ あけしの、のろ」であることに何の不思議もない。第二尚王統の出自が、その神名に反映しているのにすぎないと考える。

Ⅱ 『おもしろさうし』にみる地域間ネットワーク

今は現存していないが、首里城入り口の守礼門の左手側に園比屋武（そのひやぶ）と呼ばれる御嶽があった。別名

は金比屋武（かなひやぶ）である。この御嶽は、第一尚王統の尚巴志王時代には名木、珍花を集めた植物園であったが、第二尚氏の尚真王の時代になってから御嶽に改められた。さきにも掲げたが、卷十三―九一二のオモロは次のようなものである。

一 今婦仁（みやきせん）に 立つ雲

金雲（こがねくも） 立ち居（よ）り

大君に

追手（おゑちへ） 乞うて 走（は）りやせ

又金比屋武（かなひやぶ）に 立つ雲

銀雲（なむぢやぐも） 立ち居り

（今婦仁に立つ雲はめでたい金雲が立っている。金比屋武に立つ雲はめでたい銀雲が立っている。大君神女に追手の風を乞うて船を走らせよ／大君、高級神女である今婦仁煽りやへか。金比屋武、今婦仁グスクの中の拝所の名）

首里城近くにあった園比屋武御嶽の別称である金比屋武と同じ名前の拝所が今婦仁グスクのなかにあるというのである。

『おもろさうし』のなかで、金比屋武は十二例ある。それらのうち首里園比屋武を示す例と今婦仁金比屋武を示す例に分類すれば、以下のようになる。重複オモロを含む。

・首里金比屋武・園比屋武（併称されて謡われる）；卷三―九一、卷七―三六三

・首里金比屋武；卷六―三三六（重複オモロ）、卷二十二―一五二八）、卷四―一六四、卷七―三五七

・今婦仁金比屋武：卷十三―八二九、卷十三―九一二、卷十一―五五四（二例）（重複オモロ、卷十三―八六八（二例）ただし、首里金比屋武に分類した卷四―一六四は次のようなオモロであり、今婦仁金比屋武とも読める。

卷四―一六四

一聞多煽（あお）りやへや

中神（なかがみ）に 手摩（てづ）て

按司襲いしよ

手摩て 栄（ふさ）よわれ

又鳴響む煽りやへや

金比屋武に 手摩て

（名高く鳴り轟く煽りやへ神女が、中心になる神、金比屋武の神に祈ったからには、国王様こそ祈って末長く栄え給え／煽りやへ、高級神女名）

このオモロの脚注には、中神について「神名。中心になる神。今婦仁城の神のことらしい」とあり、「金比屋武」は「今婦仁城の中の拝所名。首里城正門前にある拝所園比屋武の異称としても使われる」とある。どちらとも判断がつかないということであろう。

ところで、「中神＝金比屋武」を祈るのが「煽りやへ」であることは偶然ではない。「煽りやへ」は、さきにも述べたように、本来は今婦仁の最高神女の名称であり、聞得大君職成立以前の最高神女職名である。今婦仁ゆかりの名を持つ神女が、今婦仁の神を祈るのは自然なことである。

なぜ聞得大君職成立以前の最高神女名が今婦仁に由来するのか。ここにも、第二尚王統と今婦仁の繋がりを見出す

ことができる。聞得大君を頂点とする神女組織が制度化されるのは、尚真王の時代である。

この次の巻四―一六五では「せりよさ（沖永良部島の古名）に 鳴響（とよ）む 聞え煽りやへや」と、煽りやへが沖永良部島に名高い存在であることが謡われる。かつての北山の最高神女名が、奄美諸島の南に位置する沖永良部島で名高いのもまた、当然である。古くは沖永良部島あたりまでが北山の勢力下にあったと考えられていることと一致する。

ただ、沖永良部島の「世之主」真松千代王子に関する「世之主由緒書」なる文書（『沖永良部島郷土資料』所収）には、三山時代の北山の領域として、今帰仁を拠点とし、国頭九間切のほか、伊江島、伊平屋島（伊平屋島、伊是名島の総称）、与論島、沖永良部島、徳之島、大島、喜界島を領し、北山王の二男真松千代王子に沖永良部島が与えられたとされる（上原、一九九二、二〇〇）。これが事実とすれば、北山の領域は、沖繩諸島北部から奄美諸島全域を含む広大なものであったことになる。

それにしても、巻四―一六四は不思議なおモロである。たとえ、このおモロの金比屋武が首里のそれであったとしても、今帰仁の高級神女であった「煽りやへ」が祈るとされていることは、今帰仁の金比屋武もまた二重になって幻視されていることを意味しているに違いない。

ところで、園比屋武の御嶽と同名の祭神を祀る御嶽が伊是名島にも存在する。琉球王府の延喜式とも言える『琉球国由来記』巻十六には、伊是名島の勢理客にあるタノカミ（田の神）嶽御イベの神名として「ソノヒヤブ」とある。この勢理客という地名が今帰仁と伊是名島にあることも、何かの符合だろうか。

ちなみに、御嶽とは一般的に言えば、村々の始祖を祀る拝所であり、イベはそのなかで最も神聖な場所とされる。イベからは始祖のものとみられる骨神（むたいじん）と呼ばれる人骨が出土する場合が多い。

以上の、園比屋武と金比屋武の関係を整理すれば、次のようになる。

首里＝園比屋武御嶽↓ 伊是名島勢理客のタノカミ御嶽のイベ名

金比屋武御嶽↓ 今帰仁グスクの拝所名

首里と今帰仁・伊是名を結ぶ構図は、まさに聞得大君の神名をめぐって現れた構図である。

『おもろさうし』のなかで園比屋武は二例だけであり、ともに金比屋武が連続して用いられている。そのうちの巻三一九一のオモロに次に一節がある。

又京の内杜ぐすく／威部の祈り しよわちへ／又石子は おり上げて／板門 げらへわちへ／又園比屋武は 金比屋武は／司祈り しよわちへ／又真石子は 積み上げて／金門 建て直ちへ

(京の内杜ぐすくでは威部＝イベの祈り、園比屋武嶽、金比屋武嶽では司祈りをし給いて、石垣を積み上げ、板門、金門を造り建て直し給いて／京の内、首里城内で神々を祀る聖なる場所。司、神女)

このオモロでは、京の内ぐすくでは「威部の祈り」をし、園比屋武嶽、金比屋武嶽では「司祈り」をするという。『おもろさうし』のなかで、「威部の祈り」と「司祈り」が対語としてでてくるオモロは五例ある。どこで「威部の祈り」「司祈り」をするか列挙してみよう。

- ・ 斎場嶽の威部 (巻一―三四)
- ・ 京の内杜グスクの威部 (巻三一九一)。京の内とは首里城内のうちの最も聖なる一画)
- ・ 首里杜の威部 (巻三―一〇一)
- ・ 首里杜の威部? (巻七―三六七)
- ・ 王城内の威部 (巻十二―七四一)

このなかには具体的にどこを指すか不明なものもあるが、聞得大君の「御新下り」を行う斎場御嶽とともに、首里城内のもっとも神聖な場所を指していることは間違いない。つまり、「司祈り」をする園比屋武、金比屋武はこれらの威部に匹敵する神聖なる場所ということになる。実際、このオモロでは「園比屋武、金比屋武」は「京の内杜ぐすく」と対語をつくっていることから、その重要さを知ることができる。

「そのひやぶ」「かなひやぶ」が謡われるオモロには興味深い共通点がある。

卷七―三六三

一 聞得大君ぎや／末 尋（と）めて 降れわちへ／成さい子思い按司襲い／御顔 合わちへ／おもかしやど 実
に ある／又鳴響む精高子が／真末 尋めて 降れわちへ

（中略）

又おぼつ君々や／大君は 祈て／首里杜 降れ欲しや／又かぐら神々や／精高子は 宣立て／真玉杜 降れ欲し
や／又園比屋武 金比屋武は／杜ぐすく げらへて／天降（あま）れ子の そこらしや

（名高く靈力豊かな聞得大君が、太陽神の末裔を探して天降りをし給い、お祈りをします。父なる、撫でいつくしむ国王様は、（中略）おぼつ君々・かぐら神々神女は、靈力豊かな大君神女は、お祈りをして、首里杜、真玉杜に降りたがっていることだ。園比屋武、金比屋武の杜ぐすくを造営して、天降りした方の喜ばしさよ。父なる国王様と顔を合わせ、心を通わせてみると、実に美しく立派な方である）

このオモロを、さきに掲げた卷三―九一のオモロと比較してみると、園比屋武、金比屋武が登場する場合、それらの言葉に結びついて、石垣を積み上げ、板門、金門を造り直す（卷三―九一）、園比屋武御嶽、金比屋武御嶽そのもの

のを造営する（巻七―三六三）と謡われるのである。これは、一体、何を意味するのだろうか。その意味を知るためには、聖地を造る、とはどういうことかを知る必要がある。

『中山世鑑』巻一、「琉球開闢之事」には次のような記事がある。

「阿摩美久が」先づ一番二、国頭二、辺土ノ安須森、次二今鬼神ノ、カナヒヤブ、次二知念森、斎場嶽、藪薩ノ浦原、次二玉城アマツヅ、次二久高コバウ森、次二首里森、真玉森、次二島々国々ノ、嶽々森森ヲバ、作りテケル」

神話的な人物、阿摩美久（アマミク。一般的にはアマミキヨ）が、沖縄島の北から南に下って森や御嶽などの聖域を造ることを語る部分である。

アマミキヨ（女神）はシネリキヨ（男神）とともに沖縄の島々、国々を造り、国土を創世した、兄妹であり、かつ人類の祖たる原夫婦である。ただし、『中山世鑑』には琉球王府の政治的意図によって、女神であるアマミクしか登場しない。

国土を創世した神話的存在・アマミクが、数多くの聖地を造営したとされるのは、聖地造営こそが国土創世そのものであり、始原の時代の営みであるからにはかならない。聖地とは、始原の世界、祖型的世界に立ちかえる場所なのである。ちなみに、『おもろさうし』で「あまみ」「あまみや」という言葉が「大昔」を意味するのは、「あまみ」に「子」を意味する「きよ」を付した「あまみきよ」が、始原（はじまり）の時代が存在であるからにはかならない。

「聖地造営」の意味をそのような視点でとらえると、首里の園比屋武御嶽Ⅱ金比屋武御嶽の造営、あるいはその門の造営をすることの意味は「始原の世界」を立ち上げることにはかならないことになる。ここで言う「始原の世界」とは、園比屋武御嶽Ⅱ金比屋武御嶽を第二尚王統の尚真王が造営したことを考えると、「第二尚王統の始原の

「世界」を立ち上げることを意味する。

つまり、このオモロに隠されている意味は、園比屋武御嶽Ⅱ金比屋武御嶽の始原の地である「伊是名島勢理客のタノカミ御嶽」あるいは「今帰仁のグスクの拝所」を立ち上げる、すなわち幻視するということである。

こうした考えは、不思議でもなんでもない。

巻五—二二二は次のようなオモロである。

一首里若細工／真物御殿 げらへて／世勝りのおぎやか思ひしよ／十百年 ちよわれ／又ぐすく若細工／すゑ
 〈精〉の御殿 げらへて／又大君は 崇べて／又押笠は 崇べて／又親のろは 崇べて／又今帰仁のあす達／誇
 て し居る 使い

（首里王城の勝れた宮大工たちが、霊力のある真物御殿を造り給いて、世に勝れた尚真王様こそ千年も末長くましませ。大君、押笠、親のろ神女たちを崇べお祈りをして、今帰仁の長老たちも誇らしく思うお招きであることよ／おぎやか、尚真。押笠、高級神女。あす達、男性の長老達）

このオモロは尚真王の御殿造営を祝福する、という内容である。注目しなければならないのは「今帰仁のあす（長老）達」が御殿造営祝福祭祀の場に招かれていることである。尚真王は第二尚王統の出自した北山（今帰仁）から、今帰仁の男性長老たちを御殿の未来を祝福するための場に招いたのである。そこには、御殿造営にあたって、王権の祖型的世界、王権の始原の世界に回帰する必要があるという思考が存在したことを読み取ることができる。

園比屋武、金比屋武の杜グスクを造営することが謡われる巻七—三六三のオモロは、次のようにはじまる。

一 聞得大君ぎや／末 尋(と)めて 降れわちへ／成さい子思い按司襲い／御顔 合わちへ／おもかしやど 実
に ある／又鳴響む精高子が／真末 尋めて 降れわちへ

(名高く靈力豊かな聞得大君が、太陽神の末裔を探して天降りをし給い、お祈りをします。父なる、撫でいつくしむ
国王様は—以下、省略)

この解釈は、二行目の「末」、最後の行の「真末」を「太陽の末・真末」を「太陽の末・末裔」、すなわち国王とみることに
よる解釈である。これは、第二尚王統以降、国王を太陽神の末裔とみる思想、すなわち太陽子思想が存在したことを
背景にするものである。

しかし、このオモロの最後に園比屋武、金比屋武の杜グスクを造営する(「第二尚王統の始原の地に立ちかえる」
ことが謡われることを考えれば、「末」「真末」を、従来の解釈通り「太陽神の末裔」ではなく、「金比屋武・園比屋
武」今帰仁に出自する国王、伊是名島に出自する国王」という解釈も十分に成立つ。

このオモロの最後の一節で「あまれこの そこらしや」「天降りした方の喜ばしさよ」と謡っている。「あまれこ」
は『おもろさうし』のなかでは、この用例しかない。あるいは、アマミキヨに対応するように、始原の世界にたちあ
らわれた存在ではないか。

第二尚王統の第三代尚真王は、さまざまな事績を残した。そのひとつに、一五〇一年、在位二五年の時、王家の陵
墓として玉御殿(玉陵)を造営したことがあげられる。尚円を見上森陵から移葬するとともに、王家の墓に被葬され
るべき有資格者とその血筋を限定した碑文を建てたのである。

有資格者とは、尚真の母、聞得大君(尚真の妹)、真鍋樽(長女)、尚清(五男)、尚韶威(三男)、尚龍徳(四男)、
尚亨仁(六男)、尚源道(七男)、それに尚真の九人である。続柄は『中山世譜』(一七〇一年編纂)による。このな

かに、すでに世を去っていた次男の尚朝榮が入っていないのは良いとして、長男の尚維衡が入っていない。これは父によって追放されたとも、尚真の一夫人による謀略によって放逐されたとも伝えられている（高良、一九八九、一八二～一八五）。ただ、ここで注目したいのは、長男（追放）、次男（死亡）を除いて残る男の子供のうち、一番年長である三男・尚韶威が今帰仁按司になっていることである。

ところで、『蔡鐸本 中山世譜』巻之四（原田禹雄訳注）によれば、「尚稷王」の説明に、「父母、降誕、薨寿ともに不伝。妃は瑞雲。世子は尚円王、次男は尚宣威王。もと、葉壁山（伊平屋諸島）の伊是名の首見の人である。康熙三十八年己卯二月七日、王の父たるをもつて国廟に奉祀された」（原田訳註、一九九八、一一一）とある。尚稷とは、金丸（尚円）の父にほかならない。

そして、尚稷の注釈に以下のようにある。

「しよ・しよく。『世鑑』に「父母ハ素ヨリ、嶋の百姓タリ。其ノ先ハ、今ニ知ルベカラズト云ヘドモ、疑フラクハ、先王ノ後胤ニシテ、故有テ彼ノ地ニ渡リ、世々、嶋の百姓トハ成ヌラン。然ラザレバ則チ如何ゾ俄カニコノ大福有ランヤ」と記す。尚稷を義本王の後裔とする口碑と、天孫氏の後裔とする口碑がある。尚永の神号からみると、天孫氏の後裔の説が、或いは有力かも知れない。伊是名玉陵に葬られている」（原田訳註、一九九八、一一一）。

伊是名島にも玉陵たまうづんがあり、尚円の父、「尚稷」を葬っているというのである。ここに記述されている義本王とは、中山最初の舜天王統最後の王である。『中山世鑑』には、義本王は徳が足りず、飢饉や伝染病が流行ったので、英祖に位を譲り、北山に隠退したとされる。なぜ、義本王は北山を隠退の地としなければならなかったのだろうか。義本王を北山に隠退させることによって、伊是名島出身とされる金丸の父・尚稷を義本王の後裔として結びつけようとする作爲を容易に読み取ることができる。義本王の墓は、琉球王国の聖地・安須森の麓にあり、地元では辺戸靈御殿と

呼ばれている。

また、国廟の注釈には「那覇市泊一丁目にあった崇元寺。臨濟宗。靈徳山。舜天以来、歴代の琉球国中山王の神主を奉祀した。冊封礼にさきだつて、この国廟で先王の論祭礼が挙げられた。沖繩戦で消失し、石門と東の下馬碑が残っている。『中山伝信録』巻五では、崇元寺先王廟の神主昭穆図に尚稷の神主はなく、天王寺の仏殿の左の一間に「帰真尚稷神位」のあることを記してある」（原田訳注、一九九八、一一二）とある。

ここでいう冊封礼とは、琉球王国成立以前から、中山、北山、南山のそれぞれの王は中国の皇帝によって王位を授かるという体制、すなわち冊封体制のなかに入っており、中国よりの使者、冊封使を迎える儀礼を冊封礼と呼んだのである。尚氏という姓もまた中国より授かったものである。冊封体制のなかに入ることにより、中国への進貢が行われる。

さきの記事では、歴代の舜天王統、英祖王統、察度王統、第一尚王統と続く中山王たちを祀つたとされる。琉球において、中山王こそが正当な王統であるという認識が存在していたことは間違いない。

一三五〇年から幕を開ける察度王統（中山）の第二代・武寧王のとき、明の冊封使が来琉し、はじめて冊封される。その後、三山統一後の中国皇帝への文書でも「琉球国王」とは記載せず、「琉球国中山王」と記載していることは良く知られていることである。あくまで「中山王」にこだわるのである。このことは、三山を統一したのが、たとえ北山王であったとしても、みずからは中山王を名乗つたに違いないのである。

さて、名嘉正八郎の『グスク（城）の姿』には「伊是名玉御殿」を次のように説明する。

伊是名玉御殿は、伝説によると、伊是名勢理客の東のはずれに祀つてあった。その後、伊是名島東方にある仲田村の東佐久原に移葬し、現在地に移されたのは尚真王時代である。同じく伝説によれば、石厨子を搭載した進貢船が伊是名島に着き、順風を待つて何回か伊是名港を出港したが、そのたびに風向きが急変して、伊是名港に

戻された。その時、ある祝女が、石厨子を2基下船させないと進貢船の那覇向け出港は不可能であるといった。そこで石厨子を下ろすと、この進貢船は難なく出港できたという。この石厨子は、中国産の閃緑岩で、尚円、尚、圓、の、父、の父、母、尚、円、妃、を、安、置、し、て、あ、る、。現在の伊是名玉御殿は、伊是名城の麓、西北西の方に向けて尚真王時代に瓦屋が建立された（傍点筆者）（名嘉、一九九四）

玉陵たまうどんを首里だけではなく、「移築」とは言え伊是名島にも造っていたのは尚真王である。そして、それは第二尚王統、初代の王・尚円の、父、、「尚稷」を祀るものだったが、伝説によれば尚円の、父、母、と、尚、円、の、王、妃、で、も、あ、っ、た、。この尚円の、父、・「尚稷」を祀るといふ発想は、第二尚王統が第一尚王統の正当な後継者であり、尚徳（第一尚王

統・最後の王）から尚円（第二尚王統・最初の王）への移行が正当なものであったという正史の記事に反するのではないか。尚円の、父、を、「尚稷」とし、あたかも尚氏にはふたつの系譜に連なる人々がいたと語っているのである。

これまでみてきたように、尚真王時代に、首里と今帰仁、伊是名を結ぶ「隠されたネットワーク」がかたちづくられていくようにみえる。

しかし、オモロは、その「隠されたネットワーク」を隠そうとはしない。

卷六―三三六

一百度踏み揚がりや

道 開けて

金比屋武 手摩て

又君の踏み揚がりや

又聞え今帰仁に

又今日の良かる日に

又今日のきやかる日に

(百度踏み揚がり神女は、お祈りをします。名高く歴史の古い今帰仁ぐすくと首里杜ぐすくの心を繋ぎます。今日の吉き日、輝かしい日に。神拝みの道を開けて、金比屋武嶽の神に祈って。／百度踏み揚がり、高級神女)

このオモロの金比屋武は首里の御嶽ではなく、「聞え今帰仁」(名高い今帰仁)とあるように今帰仁の金比屋武であることは明らかである。

首里の高級神女が今帰仁の金比屋武と心を通わせるというのである。それは、第二尚王統になっても、琉球王府の中枢に位置する人々の心のなかに、いまだ今帰仁が深く息づいていたことを示すものにほかならない。

このオモロに「道 開けて」という表現がみられるが、「みちあけ」とは神がかりするようになった神女に用いられる言葉である。この「百度踏み揚がり」という名の神女は、『おもしろさうし』に十一例でてくるが、きわめて巫性の強い神女であるようにみえる。もっとも印象的なのは、巻一―二九の、与那覇浜で赤い傘に神霊を降臨させる、というオモロであろうか。「百度踏み揚がり」は、恐らく「首里杜ぐすく」で今帰仁の金比屋武の神を寄りつかせ、その神と一体になる神女なのであろう。第二尚王統と今帰仁の直接的な繋がりを明瞭に示すオモロである。次のオモロは王府祭祀における今帰仁・金比屋武の位置づけをいかに教えてくれる。

卷十三―八二九

一東方の大主

今帰仁 金比屋武

按司襲いす

掛けて 栄（ふさ）よわれ

又てだが穴の大王

（東方の大王、てだが穴の大王が上ってくる。今帰仁ぐすくの金比屋武の神を崇めて、按司様こそ、島を支配して栄え給うのだ。／東方の大王・てだが穴の大王、太陽神。太陽は地下に開いた穴からのぼってくると考えられていた）

このオモロでは東方の大王・てだが穴の大王（太陽神）と今帰仁金比屋武への国王の祈願と繁栄への祝福が謡われている。それは、あたかも今帰仁の金比屋武の神に守護される按司が東方の霊力みなぎる太陽＝国王と同一視されているかのように読める。「東方の大王」という言葉が登場するオモロは二八例あるが、その場合、東方の大王と今帰仁金比屋武のように「東方の大王」が特定の聖域と並んでうたわれることは一例もない。いかに今帰仁金比屋武が重視されていたかわかるのである。

こうした「隠されたネットワーク」の意味するところは何か。

第二尚王統を樹立した金丸（尚円）が伊是名島の出身であったから、というだけでは解答にならない。それだけでは、今帰仁、ことに金比屋武を重視する理由を説明することはできない。

ひとつの仮説を提示しておこう。

三山統一後も、かつての北山の勢力は隠然たるものがあり、伊是名出身で今帰仁グスクを本拠地としていた金丸が第一尚王統の尚徳一族を倒し、あるいは殺害し、王位を篡奪し、正統・中山王を名乗った。それは裏を返して言えば、第一尚王統時代、いまだ三山の統一は強固なものではなかったということを物語っている。政権内部の王位篡奪（ク

「データ」ではなく、政権の外部勢力による王位篡奪であったのではないか。

一説によれば、金丸は対外交易長官にまでのほりつめ、久米村（現、那覇市。対中国交渉の外交を行っていた中国人居留区）の人々の援軍を得て、第一尚王統を倒したという（高良、一九八九、八三）。また、西原間切の内間の地頭職から中山王になった、と正史に記されていることはすでに述べた。しかし、こうした伊是名島のみならず今帰仁をあたかも首里と同一視するかのような考えを知るとき、第一尚王統の内部から台頭し、中山王になったとは考えにくいのである。

「葉壁山」（伊平屋島、伊是名島）が今帰仁と深い結びつきがあったことは、阿嘉の子・饒波の子という男性オモロ歌唱者（名人と呼ばれる）によるオモロからも明瞭に知ることができる。

卷十七——二一六

一 阿嘉の子が

伊是名 居て 見れば

今帰仁は

御酒ど 盛り居る

又 饒波の子が

伊平屋に 居て 見れば

今帰仁は

（阿嘉の子が伊是名に居て遠望すると、今帰仁はお酒をぞ盛って栄えていることだ。伊平屋に居て遠望すると、今帰仁はお酒をぞ盛って栄えていることだ。／阿嘉の子・饒波の子、尚真王時代の男性歌唱者）

ここで、伊平屋、伊是名から、富の象徴である「酒」を盛っている今帰仁を、なぜ望み見る必要があるのか、ということを考えなくてはならない。金丸の足跡をとどめているからではないか。ちなみに、『おもろさうし』では「葉壁山」の二島（この伊平屋島・伊是名島の二島は、オモロでは「いへや」と総称される）がともに登場する場合、伊是名島が最初にでてくる。

卷十七——一九八

一聞多今帰仁（みやきぜん）に

大神酒の満ち上がるぐすく

又鳴響む今帰仁に

（名高く鳴り轟く今帰仁は、神酒がいっぱい満ち満ちるぐすくであるよ）

富の象徴である神酒が「満ち上がる」と表現されている。『おもろさうし』のなかで「満ち上がる」という表現を用いられているのは、このオモロだけである。なぜ、これほどまで今帰仁の富の豊かさを賛美するのだろうか。

「伊平屋の阿母がなし」は伊是名島に在住していた、伊平屋の最高神女であり、琉球王国の高級神女三十三君の一人、初代は第二尚王統の祖・金丸（尚円）の姉、真世仁金とされる。三十三君のうち、在地の神女は、この伊平屋の阿母加那志、今帰仁の阿應理屋恵、それに久米島の君南風を数えるのみである。

久米島の祭祀体系は王府祭祀のミニチュアというべき体系を持っており、それを『おもろさうし』から明瞭に読み解くことは今のところできないが、残りの阿母加那志、阿應理屋恵は、それぞれ伊平屋と今帰仁に関係していることも、これまで論じてきたことと無縁ではない。なお、君南風は、三十三君のなかで、唯一、王族と血縁関係がない神女である。

Ⅲ 朝鮮半島へのネットワーク

1 第二尚王朝文化と朝鮮半島

首里と今帰仁、伊是名島を結ぶネットワークは、さらに奄美諸島、九州西海岸を経て朝鮮半島にまで伸びていると考えられる。

第二尚王統時代、海のはるか彼方の聖なる国に対する信仰（ニライ・カナイ信仰。本来は、地下の世界に対する信仰であったが、やがて海のはるか彼方に対する信仰に変遷してゆく）に加えて、尚真王時代以降、天上の世界（オボツ信仰）がにわかにクローズアップされてくる。『おもろさうし』のなかでも、神女たちが天上と地上世界を往還する姿がしばしば謡われることになる。

ところで、このオボツという言葉は、本来、アフ（青）という聖域を表現する言葉から転訛したもので、本来は天上の世界を指す言葉ではないという議論があるが、これは誤りである。奄美諸島・加計呂間島ではオボツを「ボツ」と呼ぶところがあり、オボツという言葉の語根は「ボツ」である（吉成、二〇〇三、一一一）。アフからの転訛とは考えられないのである。

このオボツという言葉は『おもろさうし』に記載されている以外、民俗語彙（民間で使われている言葉）として未だに残されている地域の中心は奄美諸島の奄美大島、加計呂麻島、そして沖繩諸島の北部地域などである。こうした地域では、オボツの神とは山に常にいる神とされることもある一方で、天上から降りてくる神である場合もある。

しかし、このオボツという言葉が存在する地域では、それが天上の世界を意味する言葉としか考えられない「民俗の束」が存在しているのである。

第一に樹上葬と呼ばれる葬制にかかわる問題である。樹上葬とは、文字通り、死後、遺体を樹木の上に掲げる葬法

である。

幕末期の奄美大島において、樹上葬が行われていたことは、名越左源太の『南島雑話』に記述がみられる。

「女巫死し去れば、即其尸を櫃に入れ樹の上に懸け晒風雨。三年之後石櫃に収て、神「人登」天の古き戒也と云。中古、監官禁之到ては、竊に行之纒に三、四村也。（中略）嶋中諸所山中又は村山に人を禁止、不入処あり。是多くは能呂久米の頭御印可那之葬場ならん」（傍点筆者）（名越〔国分・恵良校注〕、一九八四、一二二～一二三）。

この記事からは、この葬法がノロ（能呂久米Ⅱ神女）を対象とするものであったこと、天上他界（「神人登天」）に關係するものであったこと、樹上葬が決して例外的な習俗ではなかったこと、樹上で風葬にした後は森に改葬されたこと、などを知ることができる。

「沖繩学の父」と呼ばれる伊波普猷（一九七四（一九三九）、二八～二九）は、島袋源七が沖繩本島・国頭地方（沖繩島北部）で実見したという一本の柱の上に置かれた棺の描かれた図とともに、その周囲の木の枝などには、洗骨した髑髏が袋や芭蕉布で包んで沢山つるしてあったとする島袋源七からの聞き書きを『をなり神の島』のなかで記している。伊波普猷は、狽犬などが繁殖するようになってから、こうした形式をとるにいたったのではないかとしているが、『南島雑話』の記事と照らし合わせた場合、これは明らかな樹上葬とみなすべきであろう。

その島袋源七の『山原の土俗』には、「唄を歌ふ髑髏」という説話が収められている。

昔樵夫が木を切っていると美しい声で、女の歌うのが聞こえてくるので不思議に思い、声のあたりをみると髑髏が木にかかっており、悲惨にも鼻穴からは小さい枝がさし出していたというものである（島袋、一九二九、一四二）。これも、樹上葬を背景に成立した説話に違いない。

また、沖縄本島・恩納村では、「昔時八部落全体ノ共同墓ニシテ骨壺ニ収ムルガ如キコトナク、洗骨後ハ筈ニ入レ下ゲ、又ハ束ネテ積ミ重ネ置ク」(田村、一九二九、一四二)という風習があり、沖縄本島・与那には、かつては、アダンの茂みの砂地に死者を埋め、洗骨が済むと籠に入れてアダンの木に吊るす習俗があった(琉球大学民俗研究クラブ、一九六九、八九)。

伊波普猷の挿絵にみる葬制は、樹上葬というよりも台上葬(台を作り、その上に死者をのせて葬る)というべきものであるが、樹上葬も台上葬も、死体を高く掲げるといふ点で同一の観念に基づく葬制である。

こうしてみると、オボツという言葉が存在する地域は、樹上葬・台上葬が分布する地域とほぼ重なり合っているのである。すなわち、奄美諸島と沖縄諸島北部地域である。

樹上葬とは、本来、人間を新たに再生させるために天神に捧げるために行われる葬制であり、樹上葬の行われている民族では天上他界の観念が支配的であること(大林、一九七七a、一四八)、実際『南島雑話』ではノロの樹上葬を天上他界(神人登天)にかかわる葬制とみていることを考えるならば、この両者の分布の一致は偶然の所産ではなく、同一の観念的な基盤に根ざすものと考えざるべきであろう。

大林太良によれば、樹上葬とは、それが北アジアの狩猟民文化において典型的にみられること、日本における樹上葬とみられる習俗で最近まで実際に行われていた実例の分布が日本海側に偏っていること、朝鮮半島においては天然痘など特定の病気で死亡した場合に限り樹上葬をおこなう特殊葬法の形式をとっているが北アジアと日本の樹上葬を結ぶ位置関係にあることなどから、日本の樹上葬は、朝鮮半島を経由して流入した北方的な文化の系譜を引くものであることを指摘している(大林、一九七七a、一四二～一四九)。

もしかりに、奄美諸島から沖縄諸島北部にかけて分布する樹上葬が朝鮮半島と関連するものならば、朝鮮半島と琉球列島を結ぶ地域に連続的に分布していなければならないはずである。しかし、現在、九州で樹上葬を示唆する要素

は福岡に一例見いだせるだけである。しかも、「骨掛けの木」と呼ばれる伝説であり、福岡市の香椎宮の由来は、仲哀天皇の御柩を椎の木に掛けておいたところ、異香が四方に薫じたことに因むとするものである（柳田監修、一九四五、二六）。

樹上葬の分布をどのようにみなすべきか問題になるが、樹上葬の故地を朝鮮半島と考える立場をとる。

オボツという言葉と樹上葬（天上他界に結びつく）の分布が一致するという事実は、結局、オボツを「天上の世界」という意味にとるべきであることを示している。

ところで、オボツ神はどこに降り立つかと言えば、奄美諸島ではオボツ山であり、沖縄諸島では御嶽である。御嶽という言葉は琉球王府の法制用語的な言葉であり、奄美に御嶽という名前が存在しないのは、一六〇九年に奄美諸島以北が「島津侵攻」によって島津の領土になったことによる。逆に言えば、御嶽という言葉は用いられるようになった「島津侵攻」以降ということになる。

さて、御嶽とは、本来、人類の始祖である兄妹（兄妹が原夫婦であるとする「兄妹始祖神話」を基礎とする。琉球列島では、その兄妹が地下の世界から出現するとされる場合が多い）を祀る聖域であったが、やがて女性を霊的に優位におくという観念によって、兄妹のうち、兄は抹消され、妹、すなわち単体の女性だけが祀られるようになる。はじめの正史である『中山世鑑』で、沖縄島の聖地を造ったとされるアマミキヨが、シネリキヨをとまなわず単体で語られているのは、以上の過程と密接に結びついている（吉成、二〇〇三、一九九～二〇二）。

この御嶽に祀られる「女性始祖」もやがて、第二尚氏の天上世界を志向する統治理念によって、天上の世界から降りてくる始祖として語られるようになる。その御嶽の神を祀る村々の神女もまた「女性始祖」に重ね合わせられ、天から舞い降りる神女（天女）とみなされるようになる。

『琉球国由来記』には大里間切の宮城村、大見武村で祀る「コバダウノ嶽」の由来譚として、神女であつた天女の

骨を一ツ瀬という大石の上に葬り、村中より崇められたとする記述がある。

また、イベ名として「アマオレヅカサノ御イベ」（豊見城間切豊見城村ホボナ御嶽）、「アマフレノ御イベ」（国頭間切此地村小玉森）など、天女と結びつけられているものが少なからずあり、宮古島の嶺間御嶽では「アマレ大ツカサ」が祭神の一本の神となっている。アマオレ、アマフレ、アマレは「天降れ」であることは言うまでもない。『琉球国由来記』に記載のない奄美諸島では、ノロの始祖神話として天人女房譚が語られている（福田、一九九二、一四三）。

こうした神女のありようも、第二尚王朝が天上の世界を重視していたことを如実に示すものであろう。

こうして、御嶽に降臨する神女たちは、聞得大君を頂点とする神女組織群として整備されることになるが、それは第二尚氏三代尚真王（在位一四七七～一五二六年）の時期である。

2 言葉でたどるネットワーク

このほかに、奄美諸島から沖縄諸島南部にかけては、オボツ、樹上葬のほかに、北方的要素ともいべき要素が認められる。

この地域において特徴的にみられるものとして、シヌグとウンジャミと呼ばれる祭り、ナルコ・テルコと呼ばれる神観念などがある。

ウンジャミとシヌグの祭りをごく単純化して言えば、前者が「海」「神が寄りつく」という要素を持つ女性の祭りであるのに対し、後者は「山」「仮面仮装する」という要素を持つ男性の祭りであることである。そのウンジャミのなかで神女が神寄せのために弓を用いるという行為がみられる場合があるが、神寄せのための弓もまた南シベリアのシャーマンにおいて少なからず用いられている北方的要素である（大林、一九九一、一四三）。

さらに、ナルコ・テルコとはどのような観念かをめぐって諸説あるが、韓国のシャーマニズム、古代朝鮮語研究の

徐廷範（慶熙大学校大学院名誉教授）によれば、この「ナル」は古代朝鮮語で「太陽」を意味する言葉ではないかという。つまり、ナルコ・テルコは「太陽」を意味する言葉の暁語と考えられ、意味は太陽神ということになる。ここで、朝鮮半島が関係することは注目に値しよう。樹上葬の故地を考えるうえでの手がかりを得ることができるのである。ちなみに、徐廷範のご教示による古代朝鮮語と琉球方言のかかわりを以下に示す。

- ① ノロ：ノレ（謡う）、ノリ（遊ぶ）。神と人間の交流を意味する）に由来する。
- ② ユタ：ヌタ（言葉）。神の言葉を発する者がシャーマン。
- ③ アマミ：「母なる土地」。「アマ+ミ」と解し、「ミ」は「土」の意味。「アマミキヨ」「シネリキヨ」の「アマ」と「シネ」の対は、「女」「男」というほどの意味の対。
- ④ オボツ：語根の「ボツ」「ボッ」は、太陽を意味する「ポッ」。

朝鮮半島が関連するのはこればかりではない。あの首里と太い繋がりをもっていた今帰仁にも朝鮮半島が関連しているのである。

琉球王朝の宝剣とされる「千代金丸」^{ちよがねまる}にかかわることである。『大島筆記』には「重金丸^{ちゅうこんがん}の事を尋しに、それは琉球王第一の宝剣にて王府の中に秘蔵してあり、靈徳あり（以下省略）」とある。

ところで、この琉球王朝が第一の宝剣としていた「千代金丸」は北山、最後の王・攀安知^{はんあんち}の神器だったのである。正史は、北山滅亡について次のように記す。

中山軍は北山の主城、今帰仁城に激しい攻撃を加えるが、城が要害の地にあり、また攀安知と部下平原^{ていはら}に率いられた一千余りにおよぶ北山軍の勇猛果敢な戦いによって、攻略は思うにまかせない。そこで、尚巴志は一計をめぐらし、勇猛ではあるが智の足りない平原をそそのかし、内部分裂を誘い、その間隙を突いて今帰仁城を攻め落とすことにす

る。中山に寝返った平原は攀安知に「城を出て中山軍を蹴散らしませんか」というと攀安知はふたつ返事で同意する。中山軍相手に勇猛ぶりを発揮していた攀安知が後ろを振り向くと城から火の手があがっている。もつとも陰阻で守備の薄い西南の方向から尚巴志は軍を送りこんでいたのである。攀安知があわてて兵を城に戻すと、平原は「攀安知よ、お前は王としての資質が足りない。俺は中山に降った」と大声であげたので、攀安知は激怒し「この裏切り者め」というや否な、一刀のもとに平原を斬り殺す。乱入する中山軍相手に死力を尽くして奮戦したが、もはやこれまでと観念した攀安知は城内の守り神である靈石に向かい、「余は死ぬ、お前一人生きながらえることもあるまい」といい捨て、その石を斬り、みずからの命を絶つ。攀安知の斬りつけた靈石はイビであり、受剣石と称され、今でも城跡内にある。彼が愛用し自害に用いた刀は、城下の志慶真川に投ぜられ、その後夜な夜な妖しい光を放ったという。後世、その刀を伊平屋の人が拾い中山王に献じたが、この刀が尚家に伝わる千代金丸である。

この千代金丸は室町時代初期に製作された日本刀であり、柄の短い騎兵用のもので「大世」の二字が刻まれているとされる（高良、一九八九、七三）。

「千代金丸」は「チブガニ」と呼ばれていたが、このことに関連し、金閨丈夫はチブガニとツムガリが近い名であることを指摘し、

「それは蛇剣を意味する朝鮮語であり、期せずしてサソノヲのツムガリと一致したのである。やまとから直接入手したとすると、この名がいかに古風にすぎる。朝鮮商人が介在したと考えるほうがよいようである」（金閨、一九七五、二六～三一）と述べる。

この金閨丈夫の議論について、大林太良は、この剣の名義が蛇剣を意味するとすれば、それは水性の靈剣ということになり、持ち主の攀安知の死と共に水中に没したことや、また尚家の宝となつてからも、火災のとき火を逃れて脇

にうつって無事であったことがうまく理解できる、と指摘する（大林、一九八四、四三三）。

なぜ、滅ぼした北山の神器が琉球第一の宝剣になるのか、これをおかしいと疑わないほうがおかしいのではないか。これまでみてきたように、北山による中山王位篡奪であったからこそ「中山王」の宝剣とされるのではないか。

正史の記事にはなお不可解なことがある。なぜ、川で妖しい光を放っていた剣を伊平屋の人が拾い、中山王に献じたかとされるのかということである。今帰仁と伊平屋（伊是名島、伊平屋島）という繋がりを考えると、北山王の宝剣がそのまま中山王の宝剣に移行したようにも読める。しかも、剣を中山王に献じたのは後世のことなのである。この記述の作爲の裏を読めば、中山王位篡奪とは北山にかかわる金丸によるものであったことを知ることができるのではないか。

ちなみに、正史でいう受剣石（イビ）とは、今帰仁のカナヒヤブノ（金比屋武）御イベのことにほかならない。

さて、ここでも「チアガニ」「ツムガリ」という朝鮮語でいう「蛇剣」との繋がりが出てくるのである。そして、その繋がりは、またしても北山にかかわるものであった。

今帰仁を本拠地とし、伊平屋（伊是名島、伊平屋島）を結ぶネットワークは、さらに、それらの地域の伝統的文化との共通性をもつ奄美諸島をへて、朝鮮半島にのびていることをはっきりと知ることができる。

首里—今帰仁（北山）—奄美諸島—朝鮮半島

という繋がりにある。

近年、注目を集めているカムイヤキ（亀焼き）の問題もこうした視点から見直すと、新たな光を投げかけることができるように思う。

カムイ焼とは青灰色の薄くて硬い陶質土器のことである。これは、奄美諸島・奄美大島の南に位置する徳之島で、十一世紀から三百年にわたって作られたものであり、鹿児島県本土から波照間島におよぶ地域に分布している。『朝

『日新聞』の二〇〇三年五月十二日付夕刊に、吉岡康暢の「琉球海を征した陶器『カムイ焼』」と題する記事が掲載された。そのなかで、カムイ焼の特徴として、

- ① 左回りにロクロを使っていること
- ② 木製の板で横方向に叩いて成形していること
- ③ 表面に波形や樹の枝状の装飾が多用されていること

などをあげ、これらの特徴はいずれも朝鮮半島の高麗にみられる陶芸技術であり、中国の白磁碗をコピーした器が存在することと合わせ、国際性・境界性のきわめて濃厚な陶器であることを指摘している。また、吉岡康暢は、状況判断としたうえで、カムイ焼の経営主は、当時、奄美群島の利権を狙っていた薩摩の平氏系武士の首領が、高麗から陶工の長を呼び寄せ、南九州からも陶工を送り込み、奄美の有力者と連携して行われた特産品開発プロジェクトの一環ではないかとの見通しを述べている。

筆者が、特に興味を覚えたのは、このカムイ焼が、鉄器とともに出土する長崎県西彼杵半島産の石鍋と一緒に併存する場合があり、吉岡康暢がこのカムイ焼の担い手を「石鍋と鉄器の道」を拓いた集団にしそのまと同一とみなしていることである。吉岡康暢も指摘しているように、このカムイ焼の時代は、環東シナ海を舞台に「倭寇」に代表される海民・海商集団が非合法的な経済活動を展開する兆しも見えはじめていた時代である。こうした大きなうねりのなかで、琉球王国成立の問題を考える必要がある。そして、なぜ高麗系なのかということが問題になるが、その解答は、ここまで述べてきた流れのなかに位置づけて考えれば、ある程度の見通しを得ることができるのではないか。

この石鍋は滑石という特殊な石で製作されており、それによって産地と時代を特定することができるのである。この石鍋は琉球列島では、奄美大島・笠利、沖縄島では浦添市伊祖、西原町我謝、佐敷町佐敷、玉城のミントン城などから出土する。この石鍋の産地である長崎県西彼杵半島は「家船集団」の拠点地であり、その家船集団は松浦党の戦

關集團に組み込まれていたことを見逃すことはできない（谷川、一九九二、五七～六四）。つまり、首里から朝鮮半島を結ぶ経路のなかに、さらに九州西海岸が含まれるということである。

首里——今帰仁（北山）——奄美諸島——九州西海岸——朝鮮半島
というルートである。

考古学の白木原和美によれば、朝鮮半島から九州西海岸を経て琉球列島に至る海上ルートの開発はかなり古いものらしく、たとえば、熊本県に標式遺跡のある縄文時代前期の曾畑式土器の、土の中に滑石粉を混ぜる手法と施文法は、朝鮮半島の新石器時代を代表する櫛目文土器と同じであるという（白木原、一九九二、九一～九二）。かなり古い時期から、九州西海岸と朝鮮半島を結ぶ航路は開発されていたのである。

鉄器が十四～十五世紀頃の三山鼎立時代にすでに、沖繩諸島にもたらされており、権力闘争において大きな役割を演じていたことは想像に難くない。今帰仁の「千代金丸」の劔が琉球王の第一の宝劔とされることの意味を改めて考えてみる必要がある。

3 神女の原像

ここで、「あれ」という名の神女の問題に移ろう。

さきに掲げたオモロは次のようなものであった。

卷十七——二〇一（七一五との重複オモロ）

一 なかひやにや おわる／あれにしやよ／今（いみや）ど 降れて なよる

又せとひやにや おわる／あれ

(なかひやにや、せとひやにやに居られるあれにしや神女よ、今ぞ天降りをして神踊りなさることだ。／あれにしや、神女名)

この「なかひやにや せとひやにや」は今帰仁の勢理客の「しませんこ あけしののろ」という神女名と対を作っている言葉である。ここに登場する神女「あれ」(にしや、は接尾敬称辞)は、実は、新羅にかかわってでてくる神女なのである。すなわち、『三国史記』卷三二には「新羅二代南解王三年春に始めて始祖赫居世の廟を立て、四時これを祭り、親妹阿老をもつて祭を主ならしめた」という記事がある。

しかも、この『三国史記』の記事は、琉球列島のオナリ神信仰ときわめて良く似ていることは注目に値する。すなわち、南解王の親の妹をして始祖・赫居世を祀らせたとしていのである。これは、卑弥呼と男弟の神聖王権より、はるかに琉球王国の王と聞得大君の關係に近い(大林、一九七七b、一〇三)。

四世紀なかばに成立した新羅は、七世紀後半には朝鮮半島に統一国家を形成するが、九世紀には後百濟、高麗が建国し、十世紀初頭には高麗に降伏し、滅亡する。そして、高麗は高句麗の再興を自認するのである。こうした流れのなかでの文化的な繼承關係を認めたとしても無理な想定ではない。

こうしてみると、今帰仁にかかわって『おもろさうし』のなかで、ただ一例だけ顔を出し、かつ天上から降りてくる「あれ」という神女は、この新羅の「阿老」(読みは *ah*) と同名の神女とみなしても不自然ではないと考える。

われわれは、琉球列島のオナリ神信仰は、古くから存在した信仰であるという立場はとらない。オナリ神信仰とは、男性に対してその姉妹が靈的な力を發揮して航海の安全などを守護するという信仰である。

オナリ神信仰が琉球列島に古くからあったものではないと考えるのは、御嶽に祀られていた兄妹始祖神話に基づく兄妹のうち、兄が抹消され、女性のみが祀られるようになるのは、のちに女性が靈的に優位にあるとする信仰が導入

されたことによると考えられること、また兄妹始祖神話においては、男女に優劣がないのが原則であるが、この兄妹からはじめて生まれた女性を人類の始祖とする、女性を優位におこうとする作為が認められる伝承が存在することなどが、その理由である。たとえば、波照間島の女神・アラマレヌバア（新たに生まれた女性、の意味）の伝承では兄妹が人類の始祖であるはずにもかかわらず、その兄妹から生まれたアラマレヌバアが人類の始祖であるかのように語られるのである（住谷・クライナー、一九七七、二四八）。

琉球王国が開得大君を頂点とする神女組織は、後発の国家としてのみずからの主体性を語る必要があり、オナリ神信仰は擬似的統治理念として作為的につくられたと考えられるからである。すでに琉球王国成立前夜から、東シナ海をめぐる地域、さらには東南アジアの国々と交易を行っており、神女組織をもって国王に靈力（セヂ）を与え、国王に政治を司らせる体制の国家など存在しなかったことは熟知していたはずである。そうしたなかでの国家形成であり、他国に抗してみずからを主張する必然性があった。

そうしたモデルに新羅の伝承を利用したと想定しても不自然ではないと考える。

ここで、「あれ」に結びついて用いられている「にしや」という接尾敬称辞について検討してみよう。

『おもろさうし』のなかで、「にしや」という接尾敬称辞が用いられるのは、男性四例、女性（神女）四二例である。男性の場合、「おきて」「ものい」という部落の男性職名と、職に付随する職掌名に用いられており、その事情は神女の場合も変わらない。すなわち、この敬称辞は、「君」「のろ」「かみ」などの神女の職名・位名などと結びついており、あくまでも普通名詞とともに用いられるのである。したがって、特定神女「あれ」と結びつくのは例外と言える用例である。逆に言えば、「あれ」という神女名は普通名詞的な名称であると言えるのである。

『おもろさうし』のなかにあつて、ただ一点のオモロにしか登場せず（重複オモロは除く）、しかも普通名詞的な意味合いを持つ神女名とは一体何だろうか。しかも、その神女名は「しませんこ あけしののろ」と対をなす「な

かひやにや せとひやにや」という今帰仁に關係する言葉が用いられるオモロに登場するのである。

さらに言えば、「にしや」が結びつくのは航海守護の神女とも言える「あけしの」が六例と最も多く、しかもその用例では、ただ単に「のろにしや」「神にしや」と謡われるのである。「あけしののろ」が聞得大君の「原像」としての性格を持つていることを踏まえれば、「あれ」もまたそうした性格を持つとみなしても良いのではないか。「あけしの」もまた今帰仁に關係する神女であった。

ここに、「あれ」という神女が、聞得大君、あるいは琉球王国の神女群の「祖型的神女」であることを認めても良いと考える。

「あれ」が登場するオモロは、「一なかひやにや おわる あれにしやよ 今（いみや）ど 降れて なよる」で始まる。「今ど」（今ぞ）の用例は『おもろさうし』のなかでは七例あるが、これらの用例から「今ど」とは、祭祀が行われる「他とは替えがたい、まさにこの瞬間」であり、「時間の流れをすべて凍結させ、今この時だけが躍動している瞬間」なのである。それは、儀礼的に回帰する「始原の時」にほかならない。そうした「時」に、「あれ」が天から舞い降り、踊るのである。まさに「祖型的神女」というにふさわしい。

ちなみに、『おもろさうし』には、「今からど」（今からぞ）は一八例、「今」（今）「今の」「今わ」「今は」「今こ」「いみやとよみ」「いままさり」は一五例あるが、前者は「現在から永遠に続く未来」であり、後者は「過去と対比される現在」の意味である。

琉球王国、あるいはその成立の前段階の琉球列島と朝鮮半島との深い結びつきを考えると、金丸に縁の深い今帰仁にかかわって登場する「あれ」の名称が、朝鮮半島に由来する名前と考えても、飛躍とは思えない。そして、「あれ」にしろ「千代金丸」にしろ、すべて第二尚王統にからんでいることに注目したい。

おわりに

本稿では、琉球の統一国家、とくに第二尚氏の初期の王朝文化にかかわって、朝鮮半島の文化が色濃く反映していることを、主に『おもろさうし』の政治的編纂意図という視点から明らかにしようと試みた。『おもろさうし』を「文学」という枠のなかに閉じ込めておくのではなく、いつそう広い視点から分析することによって、新たな「歴史」が、その姿を現してくるものと考ええる。あるいは「文学」としての『おもろさうし』の解釈は、そうした作業が終わったのちに行うことによって、よりいっそうの奥行きと広がりを持つようになるのではないかと思う。

いずれにしろ、本稿での議論は、これまでの通説とはまったくかけ離れているように思われるかも知れない。しかし、そうした疑念に対しては、「『おもろさうし』はそう語っている」と答えるよりほかにない。

本稿は、琉球王権の成立と朝鮮半島とのかかわりを検討する序章である。その全体像は改めて提示することにした。

注

(1) 山内盛彬は、その論考のなかで、ノロの口伝のほかに鳥袋源七の報告も参照したと述べており(山内、一九七二、三三六)、混同説が大方の見方になるのはある意味で当然である。

(2) 琉球開闢神話に登場する男女女神であるシネリキヨ・アマミキヨは、明らかに「兄妹始祖神話」を基礎にする。しかし、琉球王国の正史において、シネリキヨ・アマミキヨは、琉球列島に暮す人々を繁栄させた原夫婦とされることもなく、またはじめの正史『中山世鑑』においては、アマミキヨのみが登場し、シネリキヨは「抹消」されている。そこには、姉妹(女性)の霊的優位という信仰(オナリ神信仰)の問題とも絡んで、琉球王府の政治的意図が介在していると考えられる。

引用文献

- 伊波普猷、『をなり神の島』（『伊波普猷全集 第五卷』平凡社）、一九七四（一九三九）年。
- 上原兼善、『琉球王朝の歴史―第一・第二尚氏の成立と展開―』（谷川健一他著『琉球弧の世界 海と列島文化6』小学館）、一九九二年。（初出は、和泊町、『沖永良部島郷土資料』一九六八年）
- 大林太良、『葬制の起源』角川書店、一九七七年（a）。
- 大林太良、『邪馬台国』中央公論社、一九七七（b）。
- 大林太良、『東アジアの王権神話』吉川弘文館、一九八四年。
- 大林太良、『北方の民族と文化』山川出版社、一九九一年。
- 金関丈夫、『発掘から推理する』朝日新聞社、一九七四年。
- 島袋源七、『山原の土俗』郷土研究社、一九二九年。
- 島袋源七、『沖繩の民俗と信仰』（谷川健一編『村落共同体』平凡社）、一九七一（一九五〇）年。
- 白木原和美、『琉球弧の考古学』谷川健一他著『琉球弧の世界 海と列島文化6』小学館、一九九二年。
- 住谷一彦・クライナー、J、『パティローマーモノグラフによる日本民族Ⅱ文化複合へのアプローチ』（『南西諸島の神観念』未来社）、一九七七年。
- 高良倉吉、『琉球王国の構造』吉川弘文館、一九八七年。
- 高良倉吉、『新版 琉球の時代―大いなる歴史像を求めて―』筑摩書房、一九八九年。
- 谷川健一、『古琉球以前の世界』（谷川健一他著『琉球弧の世界 海と列島文化6』小学館）、一九九二年。
- 田村浩、『琉球共産村落の研究』岡書院、一九二六年。
- 名嘉正八郎、『グスク（城）の姿』（南日本文化研究所叢書、鹿児島短期大学附属南日本文化研究所、一九九四年）。
- 仲松弥秀、『神と村』（新版）梶社、一九九〇年。
- 名越左源太著（国分直一・恵良宏校注）、『南島雑話』平凡社、一九八四年。
- 原田禹雄訳注、『蔡鐸本 中山世譜』榕樹書林、一九九八年。

- 福田晃、『南島説話の研究』法政大学出版局、一九九一年。
- 外間守善校注、『おもしろさうし 上・下』岩波書店、二〇〇〇年。
- 外間守善・西郷信綱校注、『日本思想体系十八 おもしろさうし』岩波書店、一九七二年。
- 柳田国男監修、『日本伝説名彙』日本放送出版協会、一九四五年。
- 山内盛彬、『聞得大君の御新下り』（谷川健一編『村落共同体』平凡社、一九七一年）。
- 吉岡康暢、『琉球海を征した陶器『カムイ焼』』（『朝日新聞』二〇〇三年五月十二日付夕刊）。
- 吉成直樹、『琉球民俗の底流―古歌謡は何を語るか―』古今書院、二〇〇三年。
- 琉球大学民俗研究クラブ、『国頭郡国頭村与那部落調査報告』『沖縄民俗』十七、一九六九年。